

いた人たちには分かってもらえないことでしょう。

また、多くの日本人が志願してまでも、お国のためにと兵隊になったり、開拓団員となったりして国を出て行き、そして「万歳！」と言って亡くなりました。

戦争と、それが原因となって起きた数々の悲惨な出来事。それらを思い出すと胸がしめつけられます。

その中でも特に、女の運命は言うに言われぬ悲しさがいっぱいです。

不幸をもたらす戦争が、二度と起こらないように祈るばかりです。

恥辱の青春

茨城県 成松 新

一 旅順への道のり

私の父新市は、佐賀市内で小間物屋を営む元佐賀藩士族成松儀平の第九子として、明治二十四年に生まれた。六歳で父を亡くし、十八歳のときには母が急逝、

さらには三人の姉を除く兄たちも早世していた。この不遇を転機に、生家を処分し長崎の造船所に勤務したのであった。

大正三年、第一次世界大戦勃発。これに参戦した日本は中国山東省青島のドイツ軍を攻略した。父は鉄道連隊に随行し、大陸への一步を踏み出したのである。

勤務に慣れたころ、いわゆる三國干渉による撤収で、通信省に移籍、新任地の四平街で同県人の妻をめぐり、長女が生まれた。お役所勤めが苦手な父は、当時としては珍しいアマチュア写真への応募を動機に、旅順で写真館を開業したのである。

大陸に活躍する邦人が、故郷への便りに添えたい晴れ姿としての写真。昭和の初期、数少ない写真館は大いに繁盛した。しかし、生後間もない男児の死去、その半年後には妻が他界するという不幸が重なった。一年後、茨城県出身の尚子を後妻に迎えた。

昭和七年、国内では五・一五事件、ヨーロッパではヒトラーが独裁体制を確立し、そして満州国が承認された。激動のこの年に私が生まれ、次いで昭和十二年

には弟が誕生した。戦雲は日中戦争から太平洋戦争へと拡大した。しかし、わが家にはひとときの楽園であった。

二 楽園から破局へ

昭和十四年、関東軍の暴挙と評されるノモンハン事件が勃発した。内地からの増援部隊が、旅順に数日滞在したことがある。多くの兵士が、記念撮影のためわが家に来店した。当時の写真技法では、引き渡しに一週間ほどを要したので、その間に部隊は前線へ向かっていた。「写真を内地の家族に送ったら、戦死したので遺影として引き伸ばしをと注文された。かわいそうなことだ」そっと漏らした父の言葉。暗幕のファイナーに映した兵士の像が、この世最後の雄姿となったのだ。

昭和十六年、母の甥、高柳利雄が中国北部の河北省で戦死した。陸軍軍曹、享年二十四歳。彼は下士官候補生として、旅順で訓練を受けた。母とともに面会に行き、彼もまたわが家を訪れた。その直後、北支駐屯の部隊に配属され戦死したのである。その彼も、父の

写した写真が遺影となった。「利雄は優しい子で、頼りにしていたのに」口数少ない母が、晩年つぶやいていた。

同年、学校教育法の改正により、小学校が国民学校と改称され「皇国ノ道ニ則リ……」の教育が徹せられた。木銃を担って敢闘訓練、軍人勅諭全文の暗唱、手旗信号、モールス通信など、通常の教科以外に軍人並みの訓練が課せられ、男児は軍人志向となった。昭和二十年春、旅順師範学校附属国民学校を卒業したが、五カ月後には敗戦で閉校となり、私たち三十八回生が最後の卒業生となった。

同年四月、あこがれの旅順中学校に入学できた。しかし、戦局の悪化により、三年生以上は飛行場建設に動員され、一、二年生の授業は打ち切られて貯水槽建設や、三八銃で装備した軍事教練が日課となった。平和な今日では想像できない学舎であった。

八月、ソ連軍は不可侵条約を破り侵攻してきた。成人男子は相次いで召集され、北滿へと向かう非常事態に、弱冠十三歳の少年にも死が迫る恐怖を感じた。

三 聖地に眠る遺骨

八月十五日正午、私たちが在校生は灼熱の校庭に整列し、直立不動で待機していた。重大放送があるというのである。

校内で聴取した教官から「恐れ多くも、天皇陛下におかれては『堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……』との仰せである。本日はこれで解散する」というような趣旨の示達があった。いわゆるポツダム宣言を受諾し、無条件降伏したとは告げられず、「苦難な戦局を立て直すため、なお一層努力せよ」と、自分なりに解した。しかし、大人たちの動揺や中国人の動静から信じがたい敗戦を知った。

数日後、学校からの連絡で登校し、白玉山に登頂した。山頂には、「聖地旅順」のシンボルとして全長二百二十八尺（約六十九メートル）の表忠塔がそびえている。かつて、旅順はその地を「聖地」と尊ばれていた。それは父祖たちが国や家族をこよなく愛し、愛するもののために戦い散華した「聖なる地」と信ずる故の尊称であった。

その表忠塔とともに、日露戦争中の旅順攻囲戦で戦没した陸海軍将兵、二万二千七百二十三体の遺骨を合祀した納骨祠がある。「急速に南下するソ連軍が旅順に侵攻するまでに、遺骨を他の場所に移動せよ」ということが、当日命ぜられた作業だった。

納骨祠から遺骨を表忠塔下まで運ぶ、これをトラックに積み込む、下山したトラックは山麓の寺院で遺骨を下ろす、という手順により作業を開始した。私は納骨祠から表忠塔下までの搬送に携わった。遺骨を納めた箱は、縦横約六十センチ、高さ四十センチほどの黒色鋼板製で、重量は二十〜三十キロ。これを二人一組で二百メートルほど運んだ。

祠は半地下構造となっており、鋼板が著しく腐食しているものもあった。シリシリと照りつける太陽に、ひんやりした鋼板が熱を帯びてくる。腐食し破損した個所から中が見えた。純白と思っていた遺骨とは違い、茶褐色の瓦礫だった。難攻不落の要塞に突撃を繰り返しては屍と化した将兵を、身元の確認をしながら個々に茶毘に付すことは不可能だったと推察される。

中国によって近年開放された旅順、白玉山の表忠塔は、「白玉山塔」と改称され、納骨祠の跡は鉄骨の電波塔となっている。過日、厚生省援護局に戦没者遺骨の行方を問い合わせたが、その資料や情報はなかった。間もなく戦没者には百年忌（百年祭）がめぐってくる。全人類が願う平和と命の貴さを思うとき、彼ら地に取り残された遺骨のことを、史実として記録にとどめておきたい。

四 無法の街

旅順へのソ連軍の侵攻は、海軍が四発の飛行艇で飛来し、陸軍は重戦車とともにだれだれ込んで来た。兵士は歴戦の強者で、囚人部隊と恐れられた。銃身が短く円盤状の弾倉を装填した自動小銃は、その形状から別名マンドリンと称される凶器であった。無秩序な勝者は、面白半分に発砲するのであった。

旧市街を占領した翌日は、新市街に進出した。伝え聞くとおりの暴漢で、山の手の住宅街を荒らし回ったが、女学校前の大通りに面したわが家付近は、将校の往来が多く手荒な事件は避けられた。しかし、衣類を

安全な場所に移そうとしたその日、強奪を目的とする兵士に襲われ、まとめた荷物をそっくり奪われてしまった。その後の侵入者には、「強奪されて金品はない」と拒む口実にした。

数日後、陸軍中佐が中国人の通訳を連れてわが家を訪れた。「夕方までに家を明け渡せ」と、軍による接収だった。しかし、行くあてがないと交渉の結果、中佐は南側の一戸分を官舎とし、北側の写真館部分を軍属の写真班が使用するので、私たちは写真班に協力する立場ということで、以前に写真技師や中国人ボーイが寝室としていた部屋に移った。

彼らが写真機器や材料を猫ばばするためには、父の知識と経験が必要だった。父へは身分証明書と給食票が交付され、一応の安全は保証された。だが、近隣から日本人の姿は減少した。旧市街に邦人が避難したのである。そして十月には、旅順全域からの退去が命ぜられた。

私たちは大連への移動を考えたが、写真班はそれを拒んだ。父は、「家族を大連に送ったら戻るから」と

いう口実で、十月七日馬車で旅大北道を大連に向けて逃げ出した。

大連では、聖徳街の父の長姉宅に身を寄せたのち、その近隣を二回転居して、最後は沙河口から西へ数キロの馬欄村に移った。内地へ帰るまでの生活費を稼ぐため、旅順から持ち出した出張撮影の機材を活かして、ソ連兵相手の写真屋を始めた。

そのために、ソ連兵が駐屯する馬欄村に住居を移したのであるが、夜の治安は最悪で、強盗、強姦などと荒れ放題。銃声は毎晩のことだった。そんな訳で私たち子供は安全な聖徳街で暮らしたが、馬欄村は度々ソ連兵に襲われた。板戸を打ち壊して侵入し、拳銃で脅しながら金品を要求したりした。あるときは逃げ出す兵士が、「布団に寝ろ」と、父のこめかみに銃口を当てたとのこと。「もう最期かと思ったよ。お金は階段裏側の壁の中に隠してある。もしものとき……」方一案を案ずる父の言葉だった。このような中、命をかけた写真屋はお金を稼ぎ、経済的には潤っていった。

五 引揚船

内地のことや、引揚げに関する情報は皆無だった。

人々はデマに惑わされたり、コックリさんという易をも頼りにしたりした。二度目の冬を迎えた十二月、日本人を統括し、ソ連軍の命令を伝達する労働組合から引揚げの情報が伝わってきた。

内地引揚げへ希望を託し、できるだけ早いグループへの編入を願った。同居していた静岡県出身の人を介して、労働組合にカンバを協力し、特別な枠に組み込んでもらった。危険を冒して稼いだお金で、早い船便の切符を掌中にした。「困っている人の預貯金の通帳を買収して取ってくれないか」と、その静岡の人から頼まれた。人助けになるし、証券を持ち帰る手段にもなる。話には乗ったが、内地で払い戻してもらえるか否かは賭けだった。

馬欄村は、数日おきに日本人が減少していった。空き家は、日没とともに中国人が家財を持ち出し、その後は家屋を解体して木材を燃料などにするため持ち去った。夜半には、例のマンドリンの銃声が響き、数日

で更地になっていた。

昭和二十二年一月、引揚げについての詳細が伝えられた。携行できる物品とその数量は厳しく、さらに、グループのなかに違反者がいると、全員が足止めになるという厳命だった。

二月三日、大連の西のはずれ、馬欄村から教台のトラックに分乗して、東端の大連埠頭へ向かった。大陸の玄関として、悲喜こもごものロマンに満ちた大連埠頭。我々は、港湾に突き出た穀物倉庫に収容された。

不凍港ではあるが、寒気が最も厳しい時期なので、海面には薄氷が漂っていた。シャッターの下側から吹き込んでくる寒風を避けながら、コンクリート床で三日間我慢した。炊飯所から運ばれる米飯はカチカチに凍り、おかずの塩鯖も木片のような硬さだった。

二月六日、船尾に日の丸の旗を掲げた引揚船「信洋丸」が接岸した。一年半ぶりに目にした日の丸に感激した。国破れて国旗あり。全員が乗船し岸壁のロープが外されたとき、再び訪れる機会はないだろうと思う感傷と、危険と卑下からの脱出に安堵する思いが脳裏

を交錯した。マンドリン銃を抱えた兵士の姿が夕暮れのなか次第に遠ざかった。

出港して二日目だった。私たちの船倉の片隅が騒がしくなった。老人が死亡したのである。「内地に帰るまでは」と、大連では挨拶代わりに励まし合っていたが、乗船して力尽きたのだ。

翌日、亡骸は重たい鉄の棒を添えて毛布にくるまれ、ロープをかけられた。甲板へ慎重に持ち上げられ、遺族や多くの人に見送られながら海面に下ろされた。亡骸を包んだ毛布は、すぐに沈んで見えなくなった。

ボーボーと突然の汽笛、飛び上がるほど大きな音。船はゆっくり円を描いたのち内地へ針路をとった。初めて目にした水葬は「遺体の海中投棄」かと思うほど、極めてショッキングな行爲だったが、船長は船中で亡くなられた方を、厳肅な儀式にのっとり葬送したのである。

十日の夕方、船は佐世保沖に投錨した。人々は歓喜していた。夕食後甲板に出ると、真昼のように明るい

ライトの下で怒号が飛び交っていた。寒さに身を震わせながら聞いていると、大連で権力をふるった労働組合に対する反発で、乗り合わせていた組合幹部を糾弾していたのである。「海に投げ込め！」と激しい声もあったが、人命にかかわることは船員が阻止した。

翌二月十一日、針尾島に上陸したが苦難はここから始まった。

六 甘かった考え

「内地に帰りさえすれば」と希望を託した寄留先は、佐賀市郊外の巨勢村の伯母（父の次姉）宅だった。その伯母方には、父の長姉一家の八人が大連から一足先に引き揚げてきていた。再会を喜ぶのも束の間で、現実には厳しかった。総員十五人が十坪ほどの家に重なり合って寝食した。一日三食を、わずかな米に大根とその葉っぱも刻み、大釜で炊き込むのである。子供たちに満腹感はなく、食べ物の話ばかりしていた。伯母夫婦がため込んでいた食糧や燃料は日に日に消えていった。「帰ってきて、ほんによかった」と、歓迎してくれた数日後には、曇った顔になっていた。

間もなく六畳一間を借りることができた。その条件の中には、毎朝みそ汁をひとり暮らしの爺さんに振る舞うこととあったが、みそは統制品で、ヤミで買うお金などなかった。最初は言い訳をしていたが、続くものではない。できないからと開き直ると、「そぎゃんなら出て行ってくんさい」と、追い出される羽目になった。

「ここを出よう」と、家探しに出かけた父母は、夕暮れ迫るころ戻ってきた。爺さんへの挨拶もそこそこに、大八車一台に荷物をのせ、その家を引き払った。歩きながら、「頭を下げて頼んでいるのに『そうそう世話はできない』と言われたのでは……」と、感情むき出しに父は怒っていた。どこで何と言われたかは察することができた。

わずか一カ月の間にねぐらは三軒目となった。この家の二階は台湾からの引揚者が借りており、私たちは玄関脇の一間を借りた。一間といっても間仕切りはなく、私生活は丸見えだった。

年頃の姉は、小倉（北九州市）の父の遠縁にあたる

会社員のもとに嫁いだ。着の身着のままという言葉があるが、まさにそのとおりで、花嫁という希望の門出に反し、肩身の狭い思いをさせた。蛇足になるが、めぼしい衣類はソ連兵に強奪され、引揚げ後は金銭に窮し、どうすることもできなかった。これも、敗戦国に引きずられた犠牲者である。

私は、四月からの通学のために、転入試験を受けなければならなかった。年齢では三年に進級するときだったが、学力はゼロだったので、やむなく二年生への転入を目指したのだった。

佐賀県立佐賀中学の試験合否の発表日。「英語はダメ、数学も不出来、これでは無理ですよ」。結果は不合格だった。しかし、同席した父は「外地では学校が閉鎖されて授業ができなかったので……」と平身低頭で懇願した。「では、一学期の結果を見ることにして……」と、一応の許しを得た。他校もあるのに、「佐賀中学でなければ将来性がない」と、父は強気であった。佐賀中学は県下最高の進学校で、私には大きなハンディだった。努力をしても追い付くことは難しかった。

た。

七 腐った肋骨

内地で初めての梅雨期に、倦怠感と微熱が続いた。近隣の内科医院で診察を受けると、結核性の肋膜炎だった。数日おきに静脈注射をうち、二、三週間通院すると平熱に戻ったのでそのまま打ち切ってしまった。医療費の負担と肋膜炎を軽視したが、後日取り返しのつかないことを起こしてしまった。

一年を経過したころ、背中の右側に痛みを感じた。それは徐々に強まり、病院に行かねばと思ったころ痛みが引いたのである。「ああ良かった、助かった」と思う間もなく、今度はその部分が腫れてきたのだった。

そして一カ月ほどすると、ゴムまりの三分の一ほどになってしまった。これを見た母は、「こんなにもなって。病院へ行かなければ」と慌てた。今度は、台湾から引き揚げてきたという医者を訪ねた。「肋膜炎が化膿したのです」と言われた。背中に注射針を突き刺すと、ガラスの筒の中が黄色い液体で凝んでいった。

紹介状を頂き、県立病院の外科で診察を受けると、「肋骨カリエスですね。手術をするから入院の手続きを」と、診断が下された。手術に対する恐怖と、医療費の心配で頭の中は真っ白になった。

手術は七月下旬の酷暑の午後だった。開始後間もなく、「あっ！」と叫ぶ医師の声。「顔を拭いてくれ、早く！」。うつ伏せの私からは見えないが、まり状となっていた患部から、膿が飛び散ったのだ。その後は黙々と処置が続いた。処置は、汚れた作業に違いなかった。「あっ、いたーい！」突然激痛が走った。激痛と言うよりは、肋骨の先端から脊髄にかけて、焼き火箸を差し込まれたような焼けつく熱さで、化膿している肋骨を切除したのだろう。局部麻酔での荒治療には、死んだ方がましだと思った。

縫合がきかず、大きな口を開けている患部は、自然に肉が盛り上がるのを待つほかなかった。「結核性の病気だから、栄養が必要だ」と指導されたが、食肉や魚類を買い求めるゆとりはなかった。入院が二カ月、その後の通院一カ月を経て傷口はやっと塞がった。

「かわいそうに、恐ろしいような傷」母の、同情と詫びの精いっぱい言葉だった。

現在も小指の太さほどの窪みでTの字を逆さまにした大きな傷痕が残っている。旅順時代に得意だった水泳も、裸になれない恥ずかしさで泳いでいない。銭湯や温泉ではコソコソと人目を避けた。「お父さん苦勞したのね、こんなになって」と、今は亡き妻が優しくさすってくれた。夢の中で、背中の傷を隠すための苦勞が度々出てくるが、一生つきまとうことだろう。

通算三カ月の医療費は、肋膜炎を診断した台湾引揚げの先生が、生活保護の手続きをしてくれたので自己負担はなかったが、カルテには「生保」と記されていた。

八 父の犯罪

引揚証明書に記載された父の年齢は五十六歳だが、満年齢では五十四、五歳だった。人生五十年の常識からは、老人の域に達していた。したがって勤め口はないし、また、本人もその気はなかった。もちろん写真屋の機材は持ち帰れず、引揚げ後のために譲り受けた

預貯金は金融政策で封鎖され、商いのための資金はなかった。

あらゆる食品が統制品に指定され、自由な売買はできなかつた。それだけに食べるという欲望は強く、違法行為だが、稼ぎになるので菓子やの仲卸しを始めた。一年半ほど継続したが利幅は少なく、食べるのが精いっぱいだった。

その後、最中の製造卸しに転向した。しかし、餡の原料となる穀物や練りあげるための水あめ、外側の皮（原料はもち米）は、すべてが統制品だったので、警察の取締り対象となった。

二度、三度、警察に捕まった父は、「引揚者で生活に困っているから」と泣き言を並べ、始末書で勘弁してもらったが、昭和二十四年夏、列車での一斉取締りの網にかかってしまった。このときは食糧管理法違反として検挙され、罰金刑に処された。この罰金がいくらだったか失念したが、納めるお金はなかつたし、借金もできなかつた。期限までに納めなければ「労役場留置」つまり牢屋に入れられるとのことだった。

翌年三月のある朝、駐在所のお巡りさんが来訪した。「では、行ってくるよ」と、背中を向けた父が小声で言い、そして両腕をお巡りさんに差し出したが、「それはいいです。では出かけましょうか」と言われた。父は、手錠を掛けられての連行を覚悟していたのである。このとき、母と弟は茨城の伯母宅へ身を寄せており、この場のことは、父と私を知るのみである。

一週間はどして帰宅した父の全身にたかつたノミと鼻を突く悪臭から、獄舎での異常な日々を察することができた。犯罪者となった父の無念はいかばかりであったか。戦後の混乱と困窮の中、この罪は妻子を護る父性本能だった。「父の犯罪」と題するこの告白は、父の気持ちを代弁する息子が、恥を忍び文字に託したものである。

九 高校を中退して

一斉取締りを受けてからは、資金繰りがつかず、最中の製造はできなくなった。さらには後払いだった原材料の支払いに窮し、事業税の滞納もあった。とにかく佐賀での生活に行き詰まったのである。そのような

ことで、母方の茨城県に逃げ出すことを考えた。

昭和二十五年春、失業対策事業で河川の汚泥除去作業が行われることになった。私は新製の佐賀県立佐賀高校二年に進級したが、どうしても現金収入が必要だった。当時「ニコヨン」と言われた日雇い労働者の賃金、二百四十円がもらえるのである。四月中旬から一カ月ほど作業に従事し、一年近く滞っていた授業料を納めることができた。このとき、無理をしながら授業料を納めたのは、茨城県の高校に転校するための在学証明が必要だったからである。

茨城県鹿島郡鉾田町の伯母宅は、和裁塾と田畑の耕作をしていた。私たちはその手伝いをしながら生計を維持する予定だったが、伯母の養子がすべての資産を処分し、その代金を東京の事業に注ぎ込むと言い出した。老齢で病弱となった伯母は、やむなくそれに従ったのである。

この結果、私たちは仕事を失い収入はたたれ、住居の立ち退きを厳しく迫られた。早速の問題は、収入を得ることである。この年、朝鮮戦争が勃発し、一部で

は軍需ブームに沸いたが、地方では金属の高騰を見たのみで、好況までは届かなかった。

熟慮の末、私は高校を中退した。このことは、私の学歴を「新制中学卒」ととめてしまった。旧制中学、新制高校と授業料を納めたのに、最終卒業校は旧制中学の三年生で、その修業年限三年をもって新制中学並みと見なされるのである。外地でのブランドや学制改革の狭間で悪い条件が重なった。

最終学歴を問われるとき、高校中退ということでも少のボカシはできるが、法的な書類では「新制中学卒」にランクされた。

学校を中退し、職安で紹介された仕事は、東京の紡績工場と地元の製菓業だった。紡績工場で入寮すると仕送りは少ないので、製菓業を選んだが、三食付きで朝六時から夜九時までの勤務だった。一カ月でいかほどの給料だったか忘れたが、父が悪性の感染症で目を患っており、当時としては高価な特效薬ペンシリンを三回ほど打つと消えてしまった。

菓子屋に勤めて三カ月後、長時間労働で低賃金なの

で職安に相談し、今度は電気工事店に就職した。

昭和二十六年、茨城県職員の採用試験があった。学歴は旧制中学または新制高校卒業程度とあった。運を天に任せて受験したのであるが、幸いにも合格することができた。受験者に対する合格者の比率は、七、八倍ほどで奇跡に等しかった。これにより、私の一生が位置づけされたのである。

当初は臨時囑託を六カ月、このとき日額百三十円。

その後、主事補で月給三千六百五十円だった。月給日に、借りていた米、みそ、しょうゆの支払いをすると残りは少なかった。家計は、十九歳の私の給料に家族四人がぶら下がり、ほかには母の和裁の縫い賃と、父の鶏卵から得られる小銭であった。

十 立ち直れなかった父

昭和三十一年、海外の預貯金の封鎖が解除されたが、インフレで価値が減少し、高校生だった弟の関西修学旅行の費用と、三十羽ほどの養鶏を始める資金に充てると、父にとって虎の子の大金は消えた。

翌年春分の日、父は波瀾の一生を閉じた。享年六十

七歳。引揚者給付金を受給するまで生存できず、衣食住のいずれをも事欠く困窮の晩年であった。

昭和三十三年、五十八歳の母が肺結核の疑いで一月入院した。精密検査の結果は気管支拡張症だったが、諸経費の支払いは、父が待望した引揚者給付金（国債）を充てた。

内地での再出発は、両親の高齢化が立ち直れなかった要因であるが、苦難の発端は敗戦にあったと思う。過去を振り返ると、人命軽視の酷たらしい戦争がいかにも愚策だったか悔やまれてならない。

戦争回避の願望から、青春時代の体験や恥辱をあえて史実として訴え、永久の平和の礎に資することができれば幸いである。